

今回、2007年3月末より2008年3月末まで、米国の研究機関及び大学及び国連本部の3カ所において、特別研究機関申請書に記載した研究計画概要について、研究を行った。米国に滞在し、それぞれの研究課題における専門家達と意見交換を行う中で、地球規模での米国の覇権強化は限界を超え、欧州、ロシア、中国などの存在感が増す中で、地球規模のパラダイムシフトが進んでいることを実感した。その基本的認識は、以下の通りである。

世界史の教訓からも、大国の興亡は、その限界を対外的に超えた時にいかなる国家も覇権を失うことを教えている。21世紀に入り、米国はブッシュ政権の下、小さな政府を標榜し、国内投資よりも軍事的な支配力を強化する選択肢を選び、結果として、120カ国で737の米軍基地と37万人の兵力を投入することで、覇権の強化を目指してきた。しかし、現時点では対アフガニスタン、対イラク戦争の泥沼から抜け出すことができずにいる。これは米国がその限界を超える覇権強化を地球規模で行っているためだ。また、21世紀の国際社会で急速に進行しているグローバリゼーションの下では、諸問題の解決のための武力行使が有効に機能しなくなっていることも示している。いまや国際社会の構図も多極化のトレンドに入り、米国のほかにもEU（欧州連合）を結成する拡大欧州やロシア、中国などがそれぞれ理念と戦略を複雑に展開する構造になってきている。ポストモダンシステムを目指し拡大EUを強化していきたい欧州は「軍事力から離れて、今や法律や国際的ルール、交渉力や交際協力の充実した世界を21世紀に築きたい」とするのに対し、米国は「国際的な法律は信頼できず、自国の安全保障は軍事力に依存する」とし、今まで京都議定書やCTBTなどの主要な国際条約を批准してこなかった。

こうした中、プーチン大統領に権力を集中させたロシアは、エネルギー資源を武器に巧妙な外交戦術で、「静かな反米同盟の構築」を模索し続けている。また、今世紀後半の次期メガパワーと見られている中国も、米国の覇権低下に伴い、国際社会ではその存在感を増している。

日本は「ポストモダンシステム」を支える平和主義ではドイツ、フランスを中心としたEUの考え方と同じ線上にあるが、外交戦略として対米追従型と見られており、新たな外交力を発揮しない限り、米国の覇権低下に伴って国際社会での存在は薄くなっていくと国際社会からは見られている。

また、他国での武力行使を行う際に慎重に扱われるべき国家主権、国際法、そして多国間主義といった問題に辛抱強く取り組むことができず、国際的反応よりも、米国内の支持基盤に向かってのみ語りかける姿勢を持つブッシュ政権のやり方は世界の他の国々と軋轢を生じさせる原因となっている。

具体的には、当初の研究課題の4点について、米国国際戦略研究所・国連本部・ハーバード大学の各機関の下で調査・研究を行った。

(1) 「平和とガバナンス」へのアプローチ

現在の問題を指摘して、政策提言を行うための研究、世界平和、安全保障、ガバナンスに影響を与える恐れのある長期的傾向やパターンを捉える研究を行った。平和構築や平和維持の分野では、いったんは収束したと思われた武力衝突の半数までが 5 年以内に再発している現状を踏まえ、長期的な平和構築への方策を分析・研究した。また、国際システムに安定と秩序をもたらす多国間主義の可能性を、国連など国際機関主導の下で実行できるかどうかを検証した。

(2) 「開発と貧困削減」問題へのアプローチ

グローバリゼーションが進む中、開発の地域格差と地域による所得、富、権力、資源配分の不公平さが顕著になっている。加えて、地域的な分裂や、社会や政治の安定を損なう政治的、民族的緊張がある場合、格差はより拡大する。こうした問題へのアプローチとして「人間開発」、「飢餓と食糧安全保障」、「ジェンダー」といった項目で実施されてきた各国際機関の成果と問題点を検証した。

(3) 「国連改革」と法の支配へのアプローチ

国連改革、特に中核を成す安保理改革が言われているが、より根本的に国際関係での合法性と正当性のギャップの拡大が国際社会での連帯感を損なっていることに着目し、最近の米国と国連の間の緊張を詳しく分析したことで、法の支配の重要性と国連システムの基礎であるルールに基づく国際秩序の重要性を検証し、4月に新しく出版された新著の中でその考え方をまとめる論文を発表した。

(4) 「米国の対アジア・太平洋政策」へのアプローチ

米国の覇権低下の下、変容しつつある米国の対中国、対朝鮮半島政策への取り組みをテーマに米国の安全保障戦略の分析し、今後のアジア・太平洋地域での各国の反応について詳しく考察した。なお、この点は、同じく4月11日に出版された新しい著作の中で、詳しく論じられている。

以上の成果を踏まえ、今回の在外研究に御協力頂いた関係者の皆様に、御礼申し上げます。